

# 高遠石工と野州石造文化 ～文芸作品からみる古賀志村と大宮村の足跡～

中川 博夫（元宇都宮市立富屋公民館）

## 1. はじめに



地図：下野（栃木県）の各地から高遠石工の足跡を辿り、本稿の関連箇所と徳次郎との位置関係

徳次郎石最後の石工、池田武夫氏は、筆者の平成7年12月18日の聞き取りに、次のように答えている。「徳次郎石工の技術は『高遠石工』による影響を受けている」（註）。当時、池田武夫氏は66歳、江戸時代の徳次郎石工について想像したことは言うまでもないが「高遠」とはだいふ謎めいたことをいうものだと思った。

これらの検証を感じながら、令和元年5月15日の徳次郎石研究会の発足となる。ますます高遠石工との関係の必要性を感じ令和4年7月11日、待望であった長野県伊那市高遠の遠石工研究センターを訪れた。江戸時代に『旅稼ぎ石工』として全国に行脚した話と高遠近辺の石仏の作品群に感動した。思いあがった表現であるが、日本の山間部の中心、長野県高遠にあってマグマの沸くごとく全国を席卷する産業と芸術が起こったことは奇跡的とさえ思えた程だ。

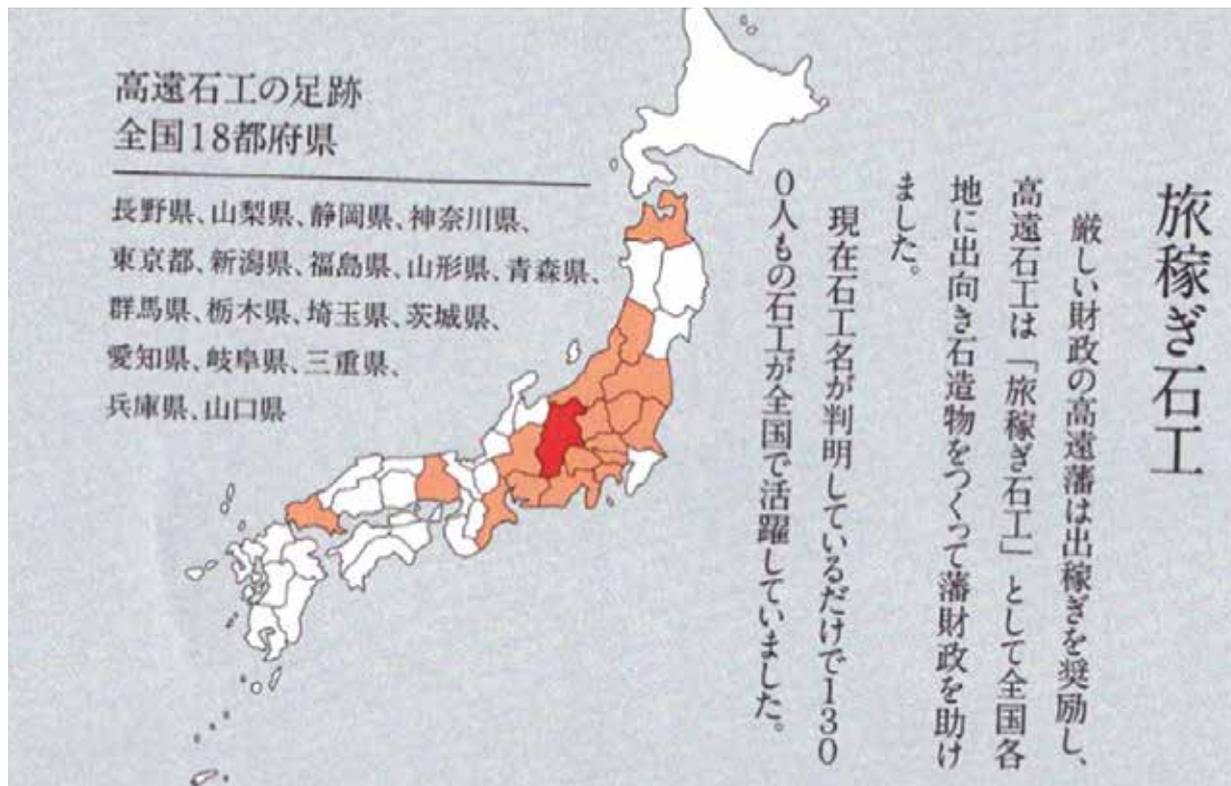
次に、本会が助成金を受けている、令和4年4月9日の宇都宮市助成金成果報告会での席上のことだ。『古賀志山を守ろう会』の理事長で、宇都宮市の古賀志町出身の池田正夫氏から、旧古賀志村に名主を務めた北條家があり、ここに4代に渡って書き続けた秘伝書ある、この中に「古賀志石」にまつわる記述があるとの話がでた。そして北條家の古文書「家伝記」を参考にして「古賀志の里 歳時記」の著しているとのことである。古賀志石は高遠石工との繋がりによって始まる事実だ。

同時に、栃木県立博物館の研究紀要等の資料の掘り起こしにも着手する。そこには田村右品氏が石仏研究に膨大な調査の実績があった。氏は併せて詩人でもあり、その詩集「野仏深情」から、下野の高遠石工の大宮村での居住のもう一つの事実が浮かび上がってきた。

ここでは、これら2つの文芸作品を中心に下野の地における高遠石工の居た足跡等を、本会の活動と共に紹介したい。なお、本会の野州石造文化と高遠石工との研究については、柏村祐司氏を中心に、今後のテーマとなっている。

註：宇都宮市役所職員自主研究『徳次郎石の研究』（都市工学研究会代表 中川博夫）平成7年度人事課提出報告書 P79

## 2. 高遠石工とは



地図：高遠石工の足跡 高遠石工の石仏巡礼ガイド P13 一般法人高遠石工研究センター

江戸時代、信州高遠は石工の里として全国的に知られていました。

石工（いしく）とは石材加工を行う職人のことで、石切（いしきり）とも呼ばれました。遠藩領内出身の石工は「高遠石工（たかとおいしく）」と呼ばれ、優れた腕を持っていました。彼らは全国各地に「旅稼ぎ石工」として出向き、出張先で石仏や石塔、石橋、鳥居、石垣など様々な石造物をつくりました。（伊那市HPより）

下野（栃木県）では、高遠石工の作品は特に農村部に多く、享保から天明のものが多い。宇都宮宿・徳次郎宿は大きな宿場のためか、現在までに高遠記銘のものはない。大谷・徳次郎の石産地を避けたのであろうか。

## 3. 池田正夫氏の著書『古賀志の歳時記』について

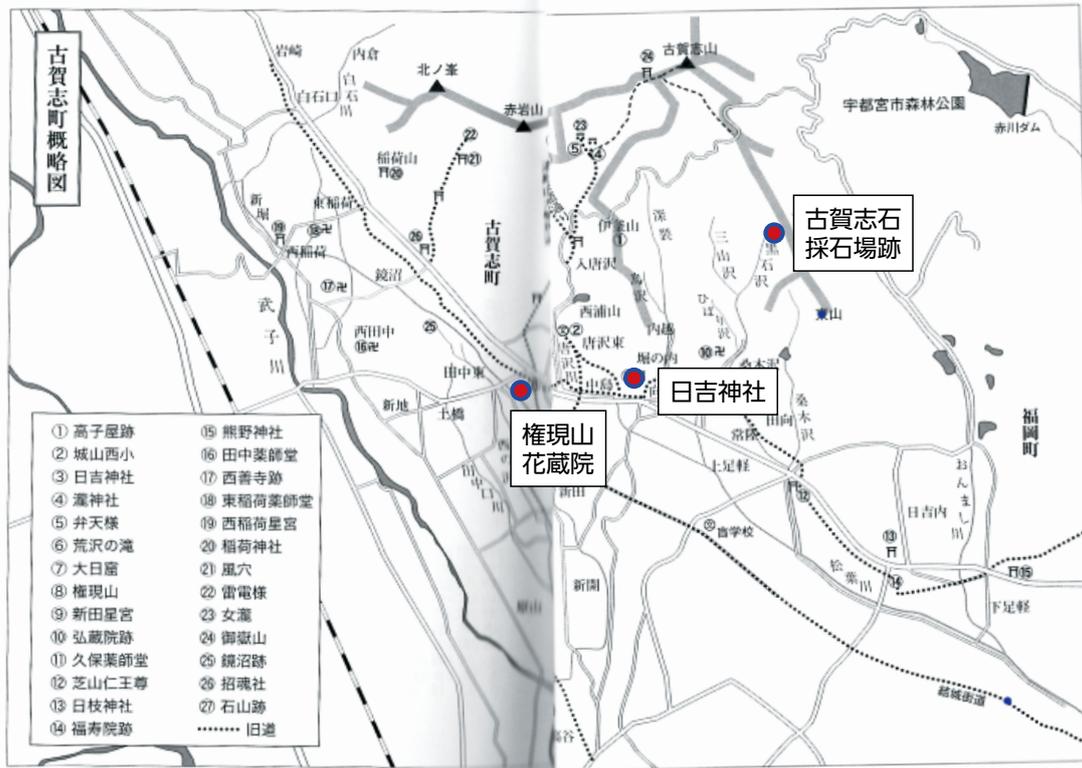
池田正夫氏は、生まれ故郷を宇都宮市古賀志町にもち、『古賀志の歳時記』～櫃と櫻は夫婦なり～（随想舎）を著した。古賀志の北條家家伝の書『家伝記3』や『如在書』の解説を行い、「タイムカプセルのような感動を共感せん」と述べている。ここから高遠による古賀志石の採石の由来と、古賀志の石造物について見ていきたい。

### ア) 古賀志村（現 宇都宮市古賀志町）について

古賀志は、栃木県の中央に位置し宇都宮市城山地区に属する地図以下の地域である。日本百低山の一つ、標高583mの古賀志山の南東山麓地帯にある。

近世は下野国河内郡古賀志村となる。江戸時代の古賀志村は、日光例幣使街道の文挾・板橋の助郷であり、往時の助郷制度はこれらの宿場と助郷村の地域間に深い交流がみられる。

（註）助郷について、本会、吉成 登氏（那須烏山市文化財審議員・宮大工・本会員）によると、在住する那須烏山市大金近辺の、墓石には徳次郎石のものが多くみられる。（石川秀夫氏（喜連川）からも同様の意見がよせられた。）これらの集落は、徳次郎宿の助郷村であり往路は資材を運び、復路はただでは帰らず徳次郎石の墓石を運搬したと説かれる。



地図：「古賀志村周辺」 古賀志の歳時記 池田正夫 著（2012年3・30）より P12・13 筆者により加筆

(イ) 北條家伝記3と古賀志石採石のおこり（『古賀志石採石場跡』は古賀志村周辺地図参照）



写真：屋号「石屋」の加工所隣の祠

『古賀志の里歳時記』によると、「正徳元卯年 信州之石工忠右衛門と云者甚左衛門方にて越年為差置候処 當山之石細工ニも可成哉と石工ヲ召連黒石山ノ石ヲ見立 割始置ニ付切出」「忠右門」を名乗る人物が古賀志村の名主中嶋北條甚左衛門の所にやってきたのは正徳元（年1711）のことであった。中嶋北條家に逗留して越年、黒石山の露岩が加工に適した石であることを確認し、この石を掘り出したのが始まりである。」と述べている。

その後、独立して、中嶋の西側に屋敷を構える。

北條甚内(通称「天神甚内」)が本拠地を構え、屋号「石屋」が始まる。

(ウ) その後の経過については、北條家墓石より明和4年（1767）高遠中伊郡藤沢荒町出身柿木甚内、古賀志村に移住、太郎兵衛家断絶の跡を継ぐ。古賀志字市場に家を構え、北條と名を改める。現在の、北條聡氏に到る。

(エ) これ以降については、柏村祐司氏の資料等をもとに現在調査中である。

(オ) 古賀志石の終焉

古賀志石の終焉は、戦前の昭和10年代である。おそらく、石工の激減により、零細の家内工業による民間宗教の様な作品では、たちいかなかったからであろう。

#### 4. 現地調査 令和4年9月12日池田正夫氏の先導での調査を行った



出発前のミーティング



かつての搬出路を行く



日吉神社を登る

##### (ア) 古賀志石搬出のルート

『古賀志の歳時記』より古賀志の『愛唱歌』に、「ドンガラ溜やミヤマザの 奥に聞ゆる石山の 石掘る音ものわびしの……」という描写があてはまるのは大正末から昭和の初頭であろうとしている。それはいかにも小規模で家庭的であったことが想像される。これを彷彿するような山道は古賀志石のくずが散乱しており、かつての搬出ルートであったことが窺える。道の形状からして、搬出には、橇と馬を使用したものと考えられる。

##### (イ) 黒石山採石地跡

明らかに、手掘りの形状がのこる。周辺に破片が多いのは、その為と考えられている。



写真：古賀志石の切り刃

(ウ) 古賀志日吉神社

古賀志日吉神社には、古賀志村の地名になった檜の木が一本あり、村民の心のよりどころであることが偲ばれる。参道の階段・鳥居・狛犬はすべからく黒石山のものであり、屋号「石屋」で造ったものと考えられる。



写真：古賀志日吉神社

(エ) 権現山の花蔵院廟所

現在草木の中にある権現山花蔵院廟所跡には、無縫塔が残されている。そこに古賀志石の如意輪観音・馬頭観音・湯殿山の石碑があり、この地はかつて結城方面への交通の要所であった。



写真：かつての祭祀の場は、今は草木の中に眠っている。ここで、家内安全・五穀豊穰を祈る行事が行われた。

## 5. 田村右品（たむらすけただ）氏の詩集『野仏心情』より

民俗学者で詩人でもある、田村右品（たむらすけただ）氏は栃木県の野仏の記録と詩を数多く残している。その詩集に「野仏深情」があり『信州石工』という詩を紹介したい。

なお、この写真を撮影した森田茂氏によると、塩谷町大宮の場所について、現在土地の形状が変わり分からなくなっていると、先日話していた。故田村右品氏が、娘「でん」の父なる石工の名、その時代など、どこから聞いたかについても分かっていない。



写真 撮影：森田茂 『野仏深情』より転載

信州石工 田村右品  
愛欲は 苦の原因  
人生は苦である  
語り掛けてく  
ひとりごと  
インドのとおいむかし  
釈迦のお言葉  
塩谷 大宮のぼちに  
信州石工娘 でん の銘  
かんぜおんぼさつさま  
わがこをいこくにほうむり  
ここに  
信州石工 のずえのはてか

詩集：『野仏深情』より 「信州石工」 田村右品

《遠い信州高遠かきた石工が、大宮村の地に辿り着く。そして家族となった娘の名は『でん』亡くなってしまったのだろう。かなしみにくれて、観世音菩薩を彫る》筆者の訳  
田村氏の詩作の姿については、次のように述べられている。

「『このへんに道祖伸や地藏さんはありますか？』と訪ねた村々や、そこで生活する人たちに直接会話して調査し、現物を見つけ、さらに野仏石仏に係った人々から伝承を記録するという遠大な探察の成果であることを知る。」  
（「しもつけ石仏探察拾遺抄」 序 山本十四尾氏より転記）

（註）山本十四尾 1935年東京都生まれ 日本の詩人 1999年現代詩人賞受賞  
下野新聞の「しもつけ文芸」現代詩の選者を20年務めた。

## 6. 観世音菩薩（石工の娘 でん）の像の搜索

令和4年12月4日 塩谷町大宮コミュニティセンター（廻谷陽一氏）により現地の方2名の協力を得て、田村右品氏の詩の信州石工の娘『でん』の観世音菩薩像の搜索をおこなった。その結果めばしい次のか所からは、発見できなかった。ほかにふさわしいところがあるのだろうか。

その後、本澤氏からほかに心当たりを探したが、「でん」観世音菩薩は発見できなかったと連絡をいただいた。

調査地元協力者 本澤光一氏（コロナ美容室） 手塚雅宏氏（手塚呉服店）

2人はささやかながらも、伝統の石仏などの、保存の活動を行っているという。大宮地区に残っているのはそういう方々の影の力によるものか。高遠作品の可能性にある銘品を掲示しておく。

(ア) 上町的場 (写真)

地域の人によると、事業により周辺の地形の変更等により大切にと寄せ集めている場所という。放置すると土に埋もれててしまう。町道、大宮・上平線（旧県道藤原・宇都宮線）大宮交番より玉生に50m右折直右。



▶ 巨大な石仏である。台座から2.5mはある



◀ でん 観世音菩薩の像に似ている



(イ) 風見のお寺 持明院（真言宗智山派）



## 風見のお寺（写真）の石仏



## 7. 講演会『高遠石工と下野の世界』の開催



令和4年12月14日 宇都宮市文化会館

筆者の高遠の訪問（2022. 7）が縁で高遠石工研究センター務局長熊谷友幸氏を招き開催した。

テーマ

- ◆「高遠石工の世界」 熊谷友幸
- ◆「下野の高遠石工」 柏村祐司（栃木県立博物館名誉学芸員）
- ◆「当会の高遠石工調査報告」 中川博夫（筆者）

熊谷友幸（1955生まれ） 映像作家・フォトグラファー（社）法人高遠石工センター事務局長  
信州伊那谷等の自然や歴史、風土などを多数記録  
映画「シルク時空（とき）をこえて」撮影・監督

## 8. むすびに

冒頭の最後の徳次郎石工池田武夫氏の『徳次郎石工は高遠石工の影響』についてもどる。

当会、池田貞夫氏により平成19年度の宇都宮市富屋地区（徳次郎町等）の調査による、『富屋の石造文化財年代別一覧』が報告されている。その結果、南北朝 1件、室町期 1件、江戸初期 8件、江戸中期（宝永元（1704）～安永10年（1781）45件、江戸後期（天明2年（1782）～慶応4年（1868）108件の石造物件となる。これらの作品の中に、「高遠」あるいは、「信州石工」の記名の文字はないという。

池田武夫氏のいう影響とは、徳次郎石工への直接の手程はないものの、見聞きした、古賀志や大宮等の高遠石工の間接的な影響とすれば、大きなものがあると思われる。

本文の、高遠石工の娘「でん」の父親の実在性を、創作だと疑う向きもあろう。だが上町的場から似た作品があることからしても、実話にもとづいて、故田村右品氏が詩作した可能性は高いものと筆者は考えている。他方、古賀志石の石工「忠右衛門」も、その後の足取りは明らかでない。又、福島県石川郡浅川町富貴作集落に住み着いた「富貴作石」の高遠藩の旅石工の「小松利平」について、「福島県南泊犬ネットワーク」より資料提供を頂いた。（本文冒頭の地図 参照）

筆者は、宇都市市制100周年当時、存命だった多くの石工達に会う機会を得た。彼らは、思いの外アカデミックである。世のものを学び聞く性向は貪欲に強い。ただそれを記録することはしなかったと元富屋公民館長岡本弘一氏は語っていた。徳次郎宿には、高遠の他以外からも多くの知見がもたらされたと一般的に説かれている、これもひとつの大きな要素であろうと考える。